

The Impact of Connected Lending on Bank Risk and Performance: Evidence from Indonesia

アジア経済研究所 濱田美紀
一橋大学 小西 大

銀行が Related lending を行う理由としては、情報の非対称性の問題を補う information view とタネリングなど、預金者や少数株主から関係者への利益の移転 looting view という2つの見方がある。実際にはどちらの視点が支持されるかは、実証の問題である。そこでインドネシアの Related lending に関するデータを用いて、Related lending が銀行のパフォーマンスに与える影響に関して検証する。

インドネシアはアジア通貨危機の影響を受け経済が混乱したが、特に1997年11月の銀行閉鎖、1998年の銀行取り付けに始まる銀行危機は、インドネシアの銀行部門に壊滅的なダメージを与えた。銀行部門の不良債権は膨れ上がり、多くの銀行が債務超過となった。銀行の関係者への貸出しが90%を超えていたという指摘がある。これを受けて中銀は、中銀への報告義務として貸出及び借入について、関係者とそれ以外の第三者にわけ、報告を義務付けたことで、関係者への貸出しが、通貨危機以降財務報告書で明記されるようになった。

インドネシアの銀行は、業績指標などでは、関係者貸出を除いた第三者からの預金および第三者への貸出を重視している。しかし、関係者の貸出は少なくともゼロではなく、銀行によって、また時期によってその割合は増加している。そこでこの関係者貸出が銀行にどのような影響を与えているのかどうかを検討する。

また通貨危機を境に、インドネシアの銀行部門のシステムは大きく改善した。危機以前のインドネシアの銀行部門は、途上国にありがちな問題を多く抱えていた（国営銀行主導の政府資金のチャネル。民間銀行は、グループ企業への資金経路）。監督機関の監視機能は十分に聞かず、プルーデンス規制も十分に効いていなかった。危機後は、中央銀行の独立性の維持や個別銀行の健全性の確保、プルーデンス規制の充実など、改革が進んだ。その結果が、銀行の行動にどのような変化を与えたのか。関係者貸出という特徴的な貸出を通じて、変化があるかどうかを検討する。